

— 糖尿病看護特定認定看護師の役割と活動 —

中学生の頃、幼なじみが1型糖尿病であり、毎日保健室でインスリンを打つ彼女と共に保健室へ行き、低血糖のときは一緒にブドウ糖を食べ、そんな青春時代を過ごしたことをきっかけに、医療職を目指しました。医師でなく看護師を選んだ理由は、彼女から感謝されたことが、cureでなく、careなのだと考えたからです。そこから、糖尿病と共に生活する人に寄り添う仕事をしたいと思うようになりました。

女子医大に入職後10年ほど糖尿病センターで病棟勤務に就き、ちょうどその頃に特定行為という研修制度を知りました。医師が減り超高齢社会に突入した日本の医療に、確実にタスクシフトが必要不可欠となる日が来ると思い、糖尿病看護認定看護師および特定行為を取得するために進学しました。

2022年からは糖尿病看護特定認定看護師として活動を始めています。現在は、糖尿病看護専門外来を中心に、糖尿病と共に生活する人へさまざまな支援を行っています。



他病棟入院中の患者さんのインスリン調整を
指導医と病棟看護師と共有している様子

主な活動内容の2023年の累計は、予防的フットケア（年間 746件）、インスリンポンプ導入・継続支援（年間650件）、透析予防指導（年間59件）、療養相談（年間507件）でした。この主な四つの活動にはどれも診療報酬が算定され、年々件数は増加傾向であり、糖尿病外来看護に対するニーズが高くなっていると感じています。

また、特定行為実践に関しては、駆け出しの段階ではありますが、入院中の他科コンサルテーションの血糖管理を糖尿病内科医師と共に協働して行っています。具体的には、比較的軽症の周術期や、ステロイド・高カロリー輸液時の血糖管理が大部分です。例えば、膵臓がんにより膵全摘された患者さんは、インスリンが必要不可欠になります。入院中は周術期の血糖管理に加え、並行してセルフケア支援を行います。この際、患者さんの生活パターンや食の傾向、家族背景を把握し、地域に戻って生活する患者さん一人ひとりに合わせた細やかなインスリン調整や低血糖へのセルフケア支援に努めています。退院後の初回外来では、療養支援を行い、シームレスな支援も行っています。患者さんから、「退院してからが本番だから、相談できて助かる、安心する」などお声をいただくこともあります。最近では、病棟看護師や訪問看護師から、治療内容に関する相談の問い合わせも増加しており、医師の判断思考を理解していることで医学的根拠を基に説明しタイムリーな対応ができるようになりました。高カロリー輸液やステロイド剤の変更時に相談を受け、高低血糖を未然に防ぐことができた事例もありました。

このような特定行為実践を通じたcareとcureを融合した医療サービスを迅速に提供できることは、特定認定看護師の強みであると思います。必要とする患者さんに、質の高い医療を提供するために、今後も研鑽を積んでまいりたいと思います。